

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第617号 平成25年9月27日

ワースト校長名の公表（2）

学力調査は、順位を競うために行っているものではありません。全ての県、全ての学校が学力向上に取り組めば、差はどんどん縮まります。しかし、オリンピックの陸上や水泳競技の様に、殆ど同時に見えてもコンマ以下のレベルでは差が付く事になります。それでも、順位が上位でなければペナルティが課せられるべきなのでしょうか。

文部科学省が学校名の公表はしないとしているのは、本来子ども達の学力向上の為に向けるべきエネルギーが、順位付という競争によって浪費する事を避けようとしているからではないかと思います。川勝知事の発言には、そうした文部科学省の意図を理解している様には、残念ながら感じられません。

もっとも、学力調査の結果について、各市町村教育委員会や学校で十分な説明責任が果たされているかといえ、疑問なしとはしません。北海道では、学力問題に対する保護者の関心は余り高いとはいえませんが、その背景には、各教育委員会や学校からの情報不足もその一因としてあるのではないかと感じています。その意味では、三重県の鈴木知事がおっしゃる様に、もっと子ども達の学力の状況や、学校の取り組み等が分かる様に、地域や保護者に対して情報提供が為されるべきだと思います。

次に、校長名を公表する、いい換えれば、競争を煽る事で、子ども達の学力向上という目的は達成できるのでしょうか。

勿論、ライバルの存在は、自分の力を伸ばす上で大きな力となります。その意味では、競争する事が悪いという事ではありません。ただ、今回の問題の様に、「順位が低かったのは許せないから責任を問う」という事になると、ともかく順位を上げれば良いのかという事にもなりかねません。

結果、試験対策に血道を上げるという事になりかねませんし、最悪の場合は、成績の悪い子は当日休ませるといった悪質なケースも生じないとはいえません。

学力調査で問われているのは、小学生であれば1年生から5年生、中学生であれば1年生から2年生の間に培われた学力です。即ち、学力調査は、一人一人の子ども達の学力の状況を把握しようとするのと同時に、各学校が、これ迄の5年間なり2年間をどの様な理念の下に教育実践を積み重ねて来たのかを問うものでもあるのです。

学力調査に反対の教師がいるとすれば、自分の教育実践の成果が問われる事への恐れがあるからではないか、というのが私の偽らざる思いです。

子どもの学力は、促成栽培の様に伸びるものではありません。小手先の試験対策によって多少成績が上がるという事はあっても、それがその子どもが身に付けた学力といえるのかは、大きな疑問です。まして、「学校としては一生懸命やっているのだが、今年の子供達の出来は良くないんだよねー」等とうそぶく事は許されません。

各学校、また各教師の皆さんは、学力調査の目的が、

- ・子ども達の学力等を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証すると共に、その改善を図る事
- ・そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立し、今後の教育指導の充実や改善等に役立てる事

にある事を、忘れてはならないと思います。

折角多額の税金を使って実施する学力調査ですから、その結果をしっかりと分析し、今後の教育課程編成に反映させていかなければなりません。

教育者の岸本裕史氏は、子ども達の基礎学力の重要性について「人が自立して、みずから己の運命を開拓していくとき、世の中が見えていなければなりません。世の中が見える力は、基礎学力を土台としてこそ、はじめてまっとうについてくるのです。今日、基礎学力の有無は、生きていく上で決定的な条件となっています。」と述べています。

この様に子ども達の成長にとって極めて重要な学力の向上は、全校上げて取り組むべきものです。その意味で校長の責任は極めて重大であり、川勝知事の発言もそうした思いが講じたものだとなれば、「ワースト100の校長名の公表」といいたくなった気持ちは理解出来なくもありません。（塾頭：吉田 洋一）